

年頭挨拶



ご挨拶

病院長 山下 静也

謹んで新年のご挨拶を申し上げます。  
皆様方におかれましては、健やかに新春をお迎えのこととお慶び申し上げます。旧年中は当院との医療連携に対して深いご理解とご協力を賜り、有り難うございました。この場を借りまして、厚く御礼申し上げます。

小生は平成27年8月より病院長を拝命致し、あつという間に1年5ヶ月が経ちました。この間、病院長と大阪大学大学院総合地域医療学寄附講座・特任教授とを兼任し、学術活動や学会関連業務も従来通りこなしつつ、病院改革に努めてきました。大阪大学をはじめ、近隣の大学とも連携した積極的な人事交流を行い、糖尿病・内分泌代謝内科部長や心臓血管外科部長が赴任されました。更に、永らく欠員となっていた消化器内科や眼科医師を確保すべく、奔走してきましたが、幸いに昨年3月途中から肝臓専門の消化器内科医1名に加え、本年1月からは消化器内視鏡専門医も加わり、4月以降は糖尿病・内分泌代謝内科の医師の増員も予定されており、診療上で最も重要である内科がやっと充実しつつあります。今後は更に常勤医師の確保に努めて、可能な限り早急に診療体制を充実させ、幅広い紹介患者様の受け入れが可能となるよう努めて参ります。

昨年4月には2年に1度の診療報酬改定が行われ、経営的に厳しい自治体病院に対して更に負担が増えており、収益上での厳しい状況が続いています。しかし、このような困難な状況の中でも、病院内のシステム改革を行うことにより、職員が一致団結して患者様を積極的に受け入れ、困難に立ち向かって収益を確保しようとして頑張っています。効果的・効率的な医療体制の構築が求められる中で、南泉州地域の中心核病院として、当院は泉州救命救急センター、泉州広域母子医療センター、国際診療科、特定感染症指定医療機関、大阪府がん診療拠点病院等の特長を活かしながら、地域の先生方と連携しつつ、超急性期医療から在宅医療・介護まで切れ目のない医療の実現に注力して参る所存です。

今後とも地域医療の連携がより一層重視される中、本年も引き続き、先生方のご指導・鞭撻の程、何卒宜しくお願い申し上げます。



平成29年の年頭に当たって

医療監 伊豆蔵 正明

新年明けましておめでとうございます。皆様には平素より、りんくう総合医療センターを御支援頂き有難うございます。

昨年は海外ではイギリスのEU離脱、アメリカ大統領選挙、テロ事件の多発などの予期せぬニュースが次々と伝えられ、日本でも熊本地震や複数の台風上陸、豊洲市場問題など驚くような事態が多く発生した一年でした。

医療の面でも大隅教授のノーベル賞受賞以外には明るい話題は少なかつたように思います。大きく揺れた新専門医制度は、プログラムの定員調整や地域医療への影響、サブスペシャリティーとの関連性など検討課題が山積し、今年の開始は延期となり、現行の学会専門医制度が継続されます。一方、厚労省が行った初期研修医のキャリアパスに関するアンケート調査では、医学博士の取得希望が42%に留まったのに対し、専門医の取得希望は93%という結果でした。専門医制度が目ざされている現在、制度がどうであれ当院は地域の中心核病院として、各医師が専門領域の専門医、指導医資格を取得或いは更新し、認定施設を維持することにより、若手医師がそれぞれの専門医を目指す環境を整えておくことが重要と考えられます。

当院は本年も地域医療支援病院として貢献できるよう努めてまいりますので、今後とも宜しくお願い申し上げます。



2017年を迎えて

初夢をみました

副病院長兼  
地域医療サービスセンター長兼  
心臓センター長 永井 義幸

米国大統領選挙が終わりトランプ氏が勝ち抜きました。従来USの掲げていた世界繁栄を目指すグローバルイズムから、まず自国の利益を優先するアメリカニズム(アメリカファースト)に方向転換すると言われていきます。りんくう総合医療センターではどうなるのでしょうか。グローバルイズムとは救急医療を幅広く担い、周産期・感染症センターや不採算部門も引き受け、南泉州の最後の砦として頑張ることになるのでしょうか。一方アメリカニズムは泉佐野ファースト、もしくはりんくう総合医療センターファーストとも言い換えられるかもしれません。ここで初夢から目覚めました。

医療の世界では経済原則のように割り切れないところも多くあります。究極的にはりんくう総合医療センターを安定運営し、地域住民に安心と安全を提供しつづけることが重要です。その意味では泉佐野ファースト・りんくうファーストでなければいけません。しかしながらそれには、市民・患者そして医療関係者から選ばれた病院を作り維持しなければ、結局は使命感にあふれた優秀な人材は、いざ余所に移ってしまいます。その結果、地域住民にも魅力の乏しい病院になってしまうのが医療の世界です。本年はりんくう総合医療センターの将来像を決めていく大事な年になります。





### 地域包括ケア体制構築における、 地域医療支援病院の役割

副病院長兼救急診療部長兼  
経営戦略室長 松岡 哲也

旧年中のご支援に対し、心からお礼申し上げます。新年を迎えて、1月が経過しました。月日の経つのは早いものです。平成26年の本誌年頭所感において、「我が国の医療を取り巻く環境は、超高齢社会を迎え変革の時期にあります。地域完結型の医療体制や、多職種連携による地域包括ケア体制の構築の重要性が盛んに提唱されています。」と記して早3年が経ちました。その間に、地域では医師会や行政が中心となつて、様々な取り組みが進められています。厚生労働省の医療費削減の方針もあつて、我が国の医療体制は「治療から介護へ」「入院から在宅へ」の方向で動いています。当センターの様な高度急性期病院には、中々に厳しい状況にあります。しかしながら、泉州南部地域では、まだまだ急性期病床は不足しており、高度急性期病床に至っては当センター以外にそれを担える病院はありません。地域包括ケア体制の構築も、核となる急性期病院の後方支援があつてこそ成し遂げられる体制整備であり、地域医療支援病院として我々の果たす役割は一層重要になっていきます。今後も、地域の医療介護福祉関係者との連携を一層密にして、地域に信頼されるりんくう総合医療センターたるよう精励する所存です。

本年も、ご指導、ご鞭撻のほど、宜しく願ひ致します。



### ご挨拶

副病院長兼看護局長 藤野 正子

謹んで新春のお慶びを申し上げます。

昨年は、患者の安心と満足を目指して看護がたなぐ地域との連携をスローガンに退院支援と地域連携の強化につとめてきました。退院患者の退院後訪問の計画も進み、今年度中に実現ができるような状況になりました。また、医療介護の協議会にも看護師が参加しケアマネジャーとの連携もとれるようになったと考えます。しかし、課題はまだ多く、今年度は関係者相互の理解やツール・仕組みづくりなどに力を入れ、地域の基幹病院としての役割を果たしたいと考えています。また昨年は、患者容態変化への早期迅速対応システムとして院内にRRSチームが起動し、看護局では患者の状態悪化を早期に発見し主治医への働きかけを行うために、クリティカルケアサポートチームを立ち上げ、重症、救急の専門・認定看護師を中心に毎日院内ラウンドをはじめたところです。

時代の変化と共に、医療を取り巻く環境も刻々と変化し続ける中、この変化に取り残されないために、また、患者様を置き去りにしないようにポジティブな組織変革を目指したいと考えます。

末尾となりましたが、皆様のご健勝とご多幸を心よりお祈り申し上げます、新年のご挨拶とさせていただきます。



### ご挨拶

事務局長 細谷 進

新年あけましておめでとうございます。今年もよろしく願ひいたします。

振り返りますと、昨年度も色々と大きなニュースがありました。世界的には、何といつてもトランプ氏の米大統領選の勝利が私には衝撃的でした。トランプ氏のこれまでの発言は私だけでなく、多くの日本人が不愉快に感じたのではないのでしょうか。また、国内でも色々とニュースがありました。熊本地震や高齢者の交通事故などが印象に残っています。ただ、それとつても、明るいニュースが少なかつたように感じるの私だけでしょうか。

私がまだ小学生の頃、小学生向けの雑誌に未来の街の絵が両開き一面に書かれていたのを思い出します。そこにはモノレールが走り、道路には電気自動車、空には大型ジェット機、海には水中翼船、家庭にはロボットのお手伝いさんがいて、料理は調理済みのものが箱から出てくるというようなものだったように記憶しています。そして、その中に描かれている人たちは誰もが笑顔だったことを覚えています。何年先の未来を描いてあったのかは忘れましたが、今ではその殆どが実現しています。でも最近、そんなことを思い出しながら、足りないのは人の笑顔だけかなと思いました。

考えてみると、以前に比べて笑顔を見ることが少なくなっているように思います。マクドナルドが「スマイル0円」とメニューに書いたのはジョークでしょうが、それほど笑顔になるということが難しい世の中になっているのではないのでしょうか。

医療に携わる一員として、良質で安全な医療を提供することは当然のことですが、声を出した笑いではなく優しい微笑みがある病院、そんな病院の一員になれたら嬉しいと思います。そのためにも、まず自分自身が率先していい笑顔に努めなければと年頭に際し、改めて思います。